

バルザックの人物描写における解剖学的視線

「短い首」の意味するもの

東 辰之介

はじめに

バルザックの小説を初めて読む者が驚くのは、話の筋が展開を始めるまでにしばしば街や建物、登場人物などの描写が延々と続くことであろう。いったいなぜ、そこまで細々とした描写に多くのページを費やさなければならぬのか、それらはいったいどんな意味を持っているのか。こうした問いかけは、結果としてある者を飛ばし読み（それが読書の喜びを増すならばおそらく歓迎すべき実践）に導き、また別の者を研究的態度へと導く。

実際バルザック研究の歩みを振り返ると、こうした描写を対象とする論考が数多く見つかる。本稿の主題である人物の描写に限ってみても、さまざまな角度から分析がなされてきた。それらを一言で要約することは不可能であるが、おおまかに言って4つのアプローチがあったように思われる。すなわち、①人物描写をモデル探しの観点から考察するもの。とりわけ作者バルザックの姿が焙り出されることになった。②『人間喜劇』における人物描写が限られた数のコードによって構築されていることを明らかにするもの。例えば青い目は行動的な人間、黒い目は情熱を秘めた人間を表すといったように、外見と内面の間に存する対応関係を解明した¹。③②のアプローチが切り開いた内在批評の方向を先鋭化したもの。人物描写に用いられる比喩に注目したテーマ批評²（記号的身体の分類学）や、人物描写が物語の展開において果たす機能（伏線、サスペンスなど）についての研究³がなされた。④①とはまた別の観点から外在的な批評を試みるもの。バルザックの人物描写が当時の博

¹ Pierre Abraham, *Créatures chez Balzac*, Gallimard, 1931.

² Jean-Pierre Richard, *Études sur le romantisme*, Le Seuil, 1970, Chapitre I, « Corps et décors balzaciens ».

³ Bernard Vannier, *L'Inscription du corps, pour une sémiotique du portait balzacien*, Klincksieck, 1972.

物学や人相学⁴、さらには解剖学、測量学⁵といった知と連続した地平にあることが示された。

これらの多様なアプローチによって、バルザックにおける人物描写が非常に興味深いものとして感じられるようになってきたわけであるが、すべてが言い尽くされたわけではない。本稿ではこれまでも何度か問題とされた「短い首」が意味するものについて、④の立場から新たな解釈を提示したい。

1. バルザック研究史における「短い首」

「短い首」に特有の問題は、②のアプローチによってあまりにも鮮やかに成功してしまった外面と内面との間にある対応関係の解明を、あらゆる身体的特徴に関して行おうとしたときに生じた。「短い首」の持ち主とされる登場人物たちが相当数いるにもかかわらず、かれらの資質の間にこれとって共通項が見つからなかったのである。そこで、「首」は頭＝精神性と胴体＝物質性をつなぐ中間項であるから、その意味は両義的にならざるを得ないのだ、という説明がなされた⁶。

このような説明は確かに、他の身体部分のコードを読み解く上で極めて有効な精神性／物質性という枠組みを保持したままで、首に関する合理的な解釈を可能にするという優れた側面を持っている。しかしながら「短い首」の説明としては明らかに不十分であろう。

ならば、「短い首」について他にどんな考え方があるのか。「短い首」を持つ登場人物リストを前にして悩むよりも、バルザック自身が「短い首」について何かきっぱりと書いていないか調べてみた方がいいだろう。すると『ルイ・ランベール』中に「ぼくがその肖像画にひどく注意を引かれた偉人たち (grands hommes) は、みな首が短いんだ⁷」という一節が見つかる。「短い首」は偉大さの証ということになるが、なぜそのようなことが言えるのであろうか。

⁴ Baldensperger, *Orientations étrangères chez Honoré de Balzac*, Champion, 1927. Chapitre V, "Pour un « Museum » de l'espèce humaine", p. 75-97.

⁵ 芳川泰久「顔面角・論—あるいは描写のパラダイム変換をめぐる」、『バルザック—生誕二百年記念論文集—』、駿河台出版、1999年。

⁶ Tahsin Yücel, *Figures et messages dans « La Comédie humaine »*, Mame, 1972, p. 110.

⁷ Louis Lambert, *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol. (以後 CH と表記), t. XI, p. 642.

これについては、単にバルザック自身の首が短かったからにすぎない、という指摘が以前からある⁸。バルザックが非常な自信家であったことを知っている者、そして肖像画等を通じてそのずんぐりとした風貌を知っている者ならば、おそらく誰も一度は肯がざるを得ないような解釈ではある。

しかしながら冷静に考え直してみると、たとえバルザックが自分の分身を作品中で好意的に描くということが頻繁にあるにせよ、自分の首が短いということだけを根拠に、『人間喜劇』における最大の思索家ともいべきルイ・ランベールをして「偉人の首は短い」と言わしめたのだと考えるのは、やや短絡的であるように思われる。むしろありそうなのは、何か根拠があつて「偉人の首は短い」という結論に至ったバルザックが、自分もそのカテゴリーに入る人間であることに思い至って満足を感じた、そしてそれを作品中でも表現した、というような事態であろう。

だとすれば、一体何がバルザックを「偉人の首は短い」という命題に導いたのか。ここで一つの可能性として浮上するのが、ラヴァター(Johann Kaspar Lavater, 1741-1801)の人相学(*physiognomie*)である。よく知られているように、ある人間の顔の特徴からその内面を推し量る技たる人相学は世の東西を問わず存在するが、バルザックの生きた19世紀前半のヨーロッパにあつては、ラヴァターの大著『人相学—あるいは人間をその容貌の特徴から知る技術』(*La Physiognomie, ou l'art de connaître les hommes d'après les traits de leur physionomie*)がその集大成として読まれていた。バルザックも1822年に「見事な出来のラヴァターを買ったよ。装丁してもらうんだ⁹。」と書簡中に記しており、『人間喜劇』においてもラヴァターの学問的功績は幾度となく賞賛されている。これらの事実をふまえて、人相学がバルザックの人物描写に何らかの影響を与えているのではないか、という観点から既にくつもの研究がなされている¹⁰。

さてこのラヴァターが「短い首」について何か書いていないか調べてみると、人相学という言葉からわれわれが通常抱くイメージと違わず、頭頂部から顎までについての考察が著作の中心となっているために、首に関する記述

⁸ André Le Breton, *Balzac, l'homme et l'œuvre*, A. Colin, 1905, p. 151-152.

⁹ *Correspondance*, textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Garnier, 1960-1969, 5 vol. ; t. I, p. 204, À Laure Surville, 20 août 1822.

¹⁰ Henri Evans, *Louis Lambert et la philosophie de Balzac*, José Corti, 1951 ; 加藤尚宏「バルザックにおけるラヴァターの影響について」、『佛蘭西文藝』第2号、「佛蘭西文藝の会」、1977年。

はわずかしかないことが判明する。「首について」という章があるにはあるのだが、1パラグラフで済まされてしまうのである。

頭と胸の中間にあつて、結果としてその両方の性質を備えている首は、人体に属するすべての部分と同様に意味深長である。長くほっそりした首と、ずんぐりと短い(*épais et enfoncé*)首を想像してみたまえ。それぞれには異なった頭が必要であると分かるはずだ。首のしなやかさや堅さには一体どれだけの意味があることだろう！ある首はお辞儀をするために作られているように思われるし、またある首は頭をもたげるためにあるかのようだ。頭を突き出すため、あるいは逆に後に引き下げるための首もあろう。これと同じ区別が各自の諸能力にも当てはまりはしないだろうか。実際、人間は優位に立つか、地を這うかのどちらかだ。進むか退くかだ。ある種の甲状腺腫は粗忽さと愚かさを間違いなく表しており、均整のとれた美しい首は良い性格の証である¹¹。

首が頭と胸の中間にあるということを目指した上で、長短、硬軟、美醜などの注目点が列挙されるこの文章は、「短い首はお辞儀などしない偉人の首である」といった誤読を誘わないでもないが、実際にはそこまで言われていない。いろいろ書かれているようでいて、いかなる首がいかなる内面を表すのかという問いには、最終文を除いて答えていないのだ。「短い首」に関しても、それに見合った頭があると述べているだけである。バルザックがこの一節を「偉人の首は短い」と読み替えたのだと考えることも不可能ではないが、かなり無理のある解釈ということになろう。ならばラヴァター原因説は却下すべきなのか。以下において、本稿独自の見解を示したい。

2. 「短い首」の解剖学的解釈へ

まずはラヴァターが他に何か述べていないか、首についての記述が具体例の解説の部分に紛れ込んでいないかを調べてみることにする。すると気になる個所としてソクラテスについての章がみつかる。ラヴァターはこの著作において人相学の説明と流布を行ったわけであるが、それと同時にこの学問を否定する人々の説得という仕事も自らに課した。そんなラヴァターが是非解

¹¹ Lavater, *La Physiognomie, ou l'art de connaître les hommes d'après les traits de leur physionomie*, L'Âge d'homme, 1998, p. 485. 現在最も手に入り易いこの版は、以下の版のリプリントである。Lavater, *Ibid.*, Traduction nouvelle par H. Bacharach, précédée d'une notice par A. d'Albanes, G. Havard, 1845.

決しておきたいと考えたのが、偉人ソクラテスの醜さという問題だった。というのも、外見の美醜は内面の美醜に一致するという彼の人相学の根本が、ソクラテスの例によって揺るぎかねないからである。そこでラヴァターは、どんな学問にも説明出来ない例外はある、ソクラテスの美は目立たなかったのを見過ごされた、現代に伝わるソクラテスの肖像画は真実を伝えていないのかもしれない、といって反論するのだが、さらにデフォルメされているに違いない肖像画にしてもよく見ると美点はあると述べて、ソクラテスの「首」が短いことに注目する。

このずんぐりと太く短い首は、あらゆる国で通用するごく一般的な判断、すなわち常識的な判断からすれば、粘り強さ(*obstination*)の徴である¹²。

「首について」の章では言及されていなかった、「短い首」の人相学的意味がここで明らかにされているのがわかるであろう。それはよい意味での「粘り強さ」を表すのである。となると「偉人の首は短い」というバルザックの説までは、あと一步のところまで来ている。「粘り強さ」こそは、偉大なことを成し遂げるにあたってもっとも重要になる美德であって、すべての「偉人」にはある種の粘り強さがそなわっているはずだ、という論理をおぎないさえすればよい。バルザックが、『人間喜劇』においてしばしばソクラテスの醜い風貌に言及していることを思い出すと¹³、その醜さについて一つの解決を与えたこのラヴァターの一節はバルザックの目を引いたに違いない。バルザックが「偉人の首は短い」という命題に至る途中で、ラヴァターのこの箇所に影響された可能性はかなり高いものと思われる。

ただしこれも、「偉人の首は短い」という説が『ルイ・ランベール』において、一種の天才たるルイによる「奇妙な(*singulier*)」事実として提示されていることを考慮すると、十分な説明とは言えないだろう。なぜなら、もしもラヴァターの言う通り「短い首」=「粘り強さ」という説が常識の名において通用しており、それがまさにルイの説を支えているのだとすると、ルイの思索家たる価値が無化されてしまうからである。むしろありそうな事態は、ルイ=バルザックには「偉人の首は短い」という法則を、ラヴァターのように経験的・統計的事実として半ば押し付けるのではなく、より説得的な方

¹² *Ibid.*, p. 68.

¹³ *La Vieille Fille*, CH, t. IV, p. 863 ; *Les Secrets de la princesse de Cadignan*, CH, t. VI, p. 978 ; *Le Curé de village*, CH, t. IX, p. 720.などを参照。

法によって説明する用意があったということである。

以上をふまえた上で、『ルイ・ランペール』中の「偉人の首は短い」という個所の再検討を行う必要があるが、まずは問題の発言がどのような文脈でなされたのかを確認しておこう。

二人が別れる少し前に、ルイは私にこう言っていた。「それをうまく表現することができればおそらくぼくの栄光となるだろう我々の身体組織に関する一般則があるのだが、それとはまた別の次元で言うなら、人間の生命は、各人においてとりわけ「脳」と「心臓」と「神経」からいわく言い難い影響を受けて決まってくる運動なんだ。これらの俗語が表現する三つの体質から「人類」の無限の型が生じるわけだけど、それらはみな、この三つの生成原理がその環境において同化する物質とどれだけの割合で結びついているかにしがつて決まってくる。」彼はここで言葉を切り、自分の額をたたくとこう言った。「奇妙だな。ぼくがその肖像画にひどく注意を引かれた偉人たち(*grands hommes*)は、みな首が短いんだ。ひょっとしたら「自然」は、彼らの心臓が普通よりも脳の近くにあることを望んでいるのかもしれない¹⁴。」

こうして長文で引用したときに誰の目にも明らかなのは、最後の「心臓が普通よりも脳の近くにある」という個所の重要性である。ここでルイは「心臓」「脳」「神経」という3つの器官のバランスが、体質の決定に深く関与するという説を開陳しているわけだが、その具体例として挙げられるのが、首の短さは脳と心臓の近さを表しており、そうした組成は偉人を生む、という考えなのである。「短い首」という外観が「脳と心臓の近さ」という解剖学的な視点からとらえ直されているのだと言えよう。

ではなぜ脳と心臓の接近によって人は偉大になるのであろうか。この問題を考える際に重要と思われるのは、バルザックがごく若い頃から精神活動の拠点たる「脳」に非常な興味を抱き、その活動がいかんにして可能なのかについて思索を重ねていたという事実である。草稿のままに残された『魂の不死に関する論考』においてバルザックは、魂が脳内に存する物質の実体であると述べた後、脳と心臓の関係をイメージ豊かに描いてみせる。

その上、脳にはあらゆる線維が達して、それらの線維に対応するあらゆる血管、管、などなどは、身体に空気と運動を送り込んでいる。しかも、血液全体を常に新しくする活力に恵まれた心臓には、栄養分があらたな精気を絶え間なく運び込み、心臓が形成する一種のボイラーから連続的に立ち上る蒸気を

¹⁴ *Louis Lambert, CH, t. XI, p. 642.*

供給している。このボイラーから出る煙が脳の湖を動かすのだ。このことは、生命がなぜ脳と心臓にかくも起因するのかを説明するように思われる¹⁵。

この必ずしも分析的ではない説明から読み取れることは、心臓には血液に活力を与える力があり、そこで生まれた力があたかもボイラーのように作用して脳に活動力を送り届けるのだとする人体理解のあり方である。これをごく散文的に整理するなら、心臓から送り出される血液が脳にその活動力を与えているということになる。すると確かに、心臓と脳が近い方がそれだけ新鮮で勢いのある血液を輸送することができるわけで、その分脳が活発になりもするし、結果として人が偉大な事業を成し遂げるチャンスも増えるのだ、という主張が導かれてもおかしくはないだろう。

しかしながら、この青年期の覚書によってすべてを説明するには躊躇がある。首の長短によって血流の勢いが影響を受けるとバルザックが考えていたと推測させる、より直接的な一文を挙げたい。

よく知られているように、首の短い人々は卒中に見舞われる¹⁶。

首が短いとなぜ卒中(apoplexie)になりやすいのか。首が短いと心臓から送り出される血流が勢いを保ったまま脳に届くから、という理屈であるに違いないが、これはバルザックの創作ではない。「卒中型の人々は、首が短く、肥満気味で、頭が大きく、顔が充血していて、多血症の一般的徴候を持つ。」と19世紀ラールスにあるし、バルザックにおける医学的記述について包括的に調べ上げたヤウアंकによれば、『結婚の生理学』の執筆当時すでに「首の短い人々は脳卒中に見舞われる恐れがあるという意見が、複数の医者によって主張されていた¹⁷」らしいのだ。

「短い首」は「脳と心臓の接近」を表し、「脳と心臓の接近」は「脳内における血流の活発さ」を表し、「脳内における血流の活発さ」は、場合によっては勢い余って脳卒中の原因となるけれども、偉人を生む可能性も秘めている、という因果関係が徐々に見えてくるが、「脳内における血流の活発さ」が強い精神力の糧となる、と言い切るにはもう少し状況証拠が必要であろう。

¹⁵ *Discours sur l'immortalité de l'âme, Œuvres diverses de Balzac*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2 vol. parus : t. I (1990), t. II (1996) ; t. I, p. 538-539.

¹⁶ *Physiologie du mariage, CH, t. XII*, p. 949.

¹⁷ Moïse Le Yaouanc, *Nosographie de l'humanité balzacienne*, Librairie Maloine, 1959, p. 233.

そこで再び『ルイ・ランベール』という文脈に戻ってみるなら、ある著名な解剖学者の名前が浮かび上がってくる。

ビシャの『生と死について』と題された著作に対するルイの感嘆が思い出される。ここにもう一人僕の師がいる、と彼は言っていた。告白するが当時私は、ビシャの著作の重要性を分かっていなかった¹⁸ […]

ここで言及されているビシャ(Marie-François-Xavier Bichat, 1771-1802)は解剖学、組織学を専門とした医者であり、主著に『生理学と医学に適用された一般解剖学』(*Anatomie générale appliquée à la physiologie et à la médecine*)や『生と死についての生理学的研究』(*Recherches physiologiques sur la vie et la mort*)がある。後者の冒頭近くにある「生命とは死に抗する諸機能の総体である」という命題はよく知られていて、近年盛んな生氣論(vitalisme)研究において、ビシャの名が言及されないことはない¹⁹。ヴィタリズムとは、デカルト以来の人間機械論に対するアンチテーゼとして存在し、生命の種々の機能を合理的に説明するためには、生命に固有の原理を想定せざるを得ないという結論に達した、当時としては非常に進歩的な教義であった。ただしその後の生化学などの発展によって、再び人体を物理的・化学的に説明する道が開けてからは、非科学的な説明に固執する反動であるとみなされるようになる。

ヴィタリズムはバルザックにおけるエネルギー論の形成に少なからぬ影響を及ぼしたが²⁰、バルザックによるビシャ理解の実態に限って言えば、むしろ誤解に満ちたものであったことが従来から指摘されている。例えば、『ルイ・ランベール』において「われわれの「意欲」と「観念」の総体は作用(Action)を構成し、外部的行為の全体は反作用(Réaction)を構成する²¹。」という考えがルイのものとして提示された後、これとビシャの考察と間にある「驚嘆すべき一致」が言われるのであるが、実際にはビシャの言う反作用は全く別の事柄を指している²²。ビシャにおける作用は環境が生命体に対して働きかけ

¹⁸ Louis Lambert, *CH*, t. XI, p. 1559, la var. c de la p. 639.

¹⁹ Roselyne Rey, *Naissance et développement du vitalisme en France de la deuxième moitié du 18^e siècle à la fin du Premier Empire*, Voltaire Foundation, Oxford, 2000, p. 323-372. など。

²⁰ Anne-Marie Lefebvre, « Balzac et les médecins du dix-huitième siècle. De l'alchimie à l'énergie vitale : le rôle des théories médicales du XVIII^e siècle dans l'élaboration de l'énergétique balzacienne », *L'Année balzacienne*, 1997, PUF, p. 193-219. に詳しい。

²¹ Louis Lambert, *CH*, t. XI, p. 627-628.

²² Jean Starobinski, « La vie et les aventures du mot "réaction" », *Modern Language Review*, janvier 1975, p. I-XXXI. 参照。

る破壊的な力、また反作用は生命体が自らを守るために外界に対して発揮する力であるのに対して、バルザックの言う作用は精神・靈魂といったものが自立的に持つ力、反作用は作用を受けた身体が外界に対して発揮する力を指す、という大きな違いがあるのである。

しかしながら、再び本稿独自の見解を述べるとするならば、ビシャの業績を必ずしもヴィタリスムの観点からのみ評価する必要はないであろう。上記の『生と死についての生理学的研究』にしても、確かに第一部「生についての生理学的研究」は生命についての理論的な論述であるが、第二部「死についての生理学的研究」は主として犬を使った果てしない生体実験（脳死、心臓死、肺の死が互いにどう連関するかを解明するのが目的）の報告であり、別の著作かと思うほど第一部とは色彩を異にしている。その第二章は「心臓死が脳死に及ぼす影響について」と題されているが、その中に次のような非常に興味深い記述があるので。

ある医者が指摘したように、首の長い動物たち、すなわち心臓が脳から遠く離れた動物たちにおいては、心臓は脳をあまり活発に動かすことができず、知性は限られ、したがってまた脳の諸機能は劣ったものとなることが一般に観察されている。逆に非常に短い首、心臓と脳の接近は普通その動物の力強さに符合する。頭が肩から非常に離れた人々と、近くにある人々を比較した場合にも、しばしば同じような現象が認められる²³。

これは、心臓の死が結果として脳の死を引き起こすことになる経路、すなわち心臓から脳へと影響を与えることができるような経路としては、血液を運ぶ血管以外に存在しない、という主張を支える根拠の一つとして書かれた一節であるが、首の長い動物の知性は限られている、首の長短によって人間の知性や力強さが決まるというのであるから、まさにルイが主張する「偉人の首は短い」という説に一致する内容であると言えよう。バルザックが『生と死についての生理学的研究』のこの部分を読んだという確証はないのだが、「偉人の首は短い」と書いたときにバルザックがイメージしていたのは、その偉人の体内にある脳であり、心臓であり、その間を結ぶ血流であったであろうことは、おそらく間違いないものと思われるのである。

²³ Marie-François-Xavier Bichat, *Recherches physiologiques sur la vie et la mort*, nouvelle édition, précédée d'une notice sur la vie et les travaux de Bichat et suivie de notes par le docteur Cerise, Fortin, Masson et Cie, 1844, p. 123. (1^{ère} édition, 1800).

3. 「偉人」と「天才」の相違

「短い首」の意味するものを以上のような解剖学的な視線の下で解釈することによって、「偉人の首は短い」という命題の根拠をなんとか理解できるようにしても、先行研究が指摘しているように、「元徒刑囚²⁴」や「凶暴な農民」までもが「短い首」を持っているのはなぜなのだろうか。この問題は、そもそも「偉人」(grands hommes)とはいかなる人間を指すのかを考えることによって解決可能であるように思われる。ファラベッシュとミシュエの人物造型について詳細に考察してみることに従って、バルザックにおける「偉人」の観念を明らかにしてみる。

まず「元徒刑囚」ファラベッシュの場合。確かにファラベッシュは、「火あぶり党」(強盗の際に金の在処を白状させるため、被害者の足を火あぶりにする犯罪者集団)の一員であったため裁判で有罪判決を受け、徒刑囚の生活を送った前科者とされており、その姿を初めて見た『村の司祭』のヒロイン、ヴェロニックにも「内に隠れた凶暴さ²⁵」や「皮肉と危険な大胆さ」といった非常に悪い印象を与えている。しかしながらこの第一印象とは裏腹に、ファラベッシュを良く知るモンテニャックの森の管理人は、その半生を同情と賞賛を込めて語っている。旧家の末子であるファラベッシュは、二人の兄が若くして戦死したのを見て徴兵忌避を決心し、森での生活を余儀なくされたために仕方なく「火あぶり党」に加わったのであり、ボネ司祭の説得を受けて自首した後は、模範的な徒刑囚として刑期を終えた人間であると説明されるのだ。

『村の司祭』における主題が、共謀殺人の責を一人負って処刑された愛人を見殺しにする形となったヴェロニックが、ボネ司祭の導きの下でいかに魂の救済をすることができるか、そしてそれがどれほど困難な仕事であるか、という点にあったことを思い出せば、改心を成し遂げたファラベッシュは、ヴェロニックが見習うべき人間的偉業の達成者として理解されるべきであろう。実際ファラベッシュはボネ司祭がモンテニャックで成し遂げた「最初の勝利²⁶」なのであり、その仕事への愛といい家族への愛といい、カトリック的理想を描きだそうとした『村の司祭』という作品の文脈において、ファラベッシュがある種の人間的完成を体現していることは間違いないように思わ

²⁴ Tahsin Yücel, *op.cit.*, p. 110.

²⁵ *Le Curé de village*, CH, t. IX, p. 765.

²⁶ *Ibid.*, p. 791.

れるのである。

「凶暴な農民」ミシューの場合はどうだろうか。ミシューもまたファラベールと同じく、いやそれ以上に野蛮な悪い人間として提示されている。例を挙げるなら、「太く短い首は、法の刃を引き寄せようとしているかに見えた²⁷。」「侯爵夫妻の処刑の日、見物の人々はゴンドルヴィル荘園の管理人の姿を認めて、なんとなく恐ろしい気がした²⁸」（主人の死刑をわざわざ見に来た、という忘恩が想定されている）「ミシューの性格の犖猛さが、再び一般に信じられることになった²⁹」「何かひどい悪事を働きかねない男という評判を取った³⁰」という具合である。

しかしながら、これら語り手によるミシューの粗描は、外観のみに限定した描写、または評判の報告という形をとっており、ミシューを凶暴であるとか、悪人であるとか全知の立場から断定したものではないことに注意する必要がある。このような断定を避けた描写は、バルザックが歴史的な事件を題材にして『暗黒事件』という作品を執筆するにあたって、その事件が孕んでいた謎を謎のままに表現し、さらに謎の解明にあたっては十分サスペンスの効果を考えた上で行う、という技法を用いたことによる。いずれにせよミシューは、その外観の不十分な解釈や単なる評判が予想させるのとは違って、「偉大な将軍³¹」「偉大な雄弁家」「偉大な犯罪者」に喩えられるような偉丈夫であり、実は革命によって財産を没収された元主人シムーズ侯爵の領地ゴンドルヴィルを、管理人という立場に居座ることで守り切り、いずれその土地をシムーズ家の息子たちに手渡すことをその望みとしてもう 12 年も孤軍奮闘している人物なのである。シムーズ家の財産を守るという正義をその仕事としていると言える限りにおいて、ミシューにある種の偉大さを認めることはさして困難ではないように思われる。

したがって、ファラベールにしてもミシューにしても、それぞれカトリックや封建秩序といった評価基準からすれば、ある種の「偉人」に分類することが可能であるような存在なのである。その限りにおいて二人は、「偉人の首は短い」というルイ・ランベールの命題を身をもって証明していると言えるだろう。

²⁷ *Une ténébreuse affaire*, CH, t. VIII, p. 503.

²⁸ *Ibid.*, p. 506.

²⁹ *Ibid.*, p. 508.

³⁰ *Ibid.*, p. 510.

³¹ *Ibid.*, p. 530.

ただし、この二つの例だけではバルザックにおける「偉人」の観念を明らかにするには十分ではないだろう。ここで新たに注目したいのが「脳」だけが発達していて、それが心臓からの血流の豊かさという裏付けを欠いているなら、その人物は天才であったとしても偉人ではない、という結論を導くようないくつかの例である。

その第一として挙げたいのが、「偉人の首は短い」と発言したルイ・ランベール自身である。ここでルイが自分自身を「偉人」に含めていないことはまず間違いないが、作品中にルイの首についての記述はなく、その長短は分からない。ただ気になるのはルイの「額の大きさには何か異常なものがあつた³²」という箇所である。はたして、この巨大な頭脳は身体からそれに見合うだけのエネルギーを得ているのかどうか。ルイの人物描写には次のような一節がある。

最後に彼の頭はあまりにも重いせいか、それとも急激な飛翔に疲れたのか、胸の上に再び落ち込んだ³³。

あまりの重さゆえにぐったりと垂れてしまう頭のイメージ、これはルイの頭脳が、あまりにそれだけで発達してしまっていて、その過剰な活動を身体が支えきれないような状態、言い換えれば思考が思考のまま過熱するばかりで、具体的な行動にも精神的な仕事の完成にも結びついていかないような状態に陥ってしまっていることを暗示してはいないだろうか。実際、ルイはパリに移って現実における自分の無力を感じ、結婚を前に発狂、忘我の状態から回復することなく夭折し、残されたものは妻が書き取ったいくつかの断章のみ、という無残な生涯を送ることになる。思うに、「偉人」というカテゴリーを考える上でおそらく必要になるのは、心臓を単なるエネルギーの供給器官としてではなく、知性を司る脳という器官の暴走を防ぎ、その舵取りもできる器官としてもとらえてみることではないか。脳が心臓に近いというのは、二つの器官の間で非常に密な連絡が可能になるということ、そしてそこに確かな調和のあることを示しているように思われるのである。しかしそう断言する前に、ルイと同じく天才型の登場人物である画家フレンホーフエルの例も見てみよう。

³² *Louis Lambert, CH, t. XI. p. 605.*

³³ *Ibid., p. 623.*

まるでラプレーかソクラテスの鼻のような、先の反り返った小さなひしゃげた鼻の上に、禿げ上がって丸く突き出た額がぐっと落ちかかっているところを想像していただきたい。[...] こういう頭をほっそりと弱々しい胴体にのせてみたまえ³⁴ [...]。

ここにもはっきりと認められる「額＝脳」の発達と「胴体」の未発達というアンバランスは、おそらくフレンホーフェルの生涯の作が絵の具の堆積に過ぎなかったという作品の結末に符合している。頭脳ばかりが肥大した体型は、身体を使った実際の活動（この場合は作品制作という現実的作用）における何らかの欠陥、すなわち理想（妄想？）の世界への没入を暗示していると考えられよう。脳が心臓という器官の許す人間的な限度を超えて活動しても、それはある種の不毛な結末を迎えるだけであって、現実的な偉業が達成されることはない、といったことがここでは暗示されているのだ。

ルイとフレンホーフェルの例から、挫折する天才タイプの登場人物が、大きすぎる頭に比べて弱々しい体しか持っていないことを示したが、それにしても彼らの「首」について特に言及があるわけではないし、「偉人」とは何かがこれによって直接明らかになるわけでもない。しかしながら上記すべてを勘案すると、「脳のみが発達した天才」と「脳が短い首を通じて心臓から人間的な力を十分に得ている偉人」とも呼ぶべき異なる二つのカテゴリーの存在が認められるように思われる。この「超人的存在」と「偉人的存在」との対立関係がはっきりと見出される作品が、ある種の「超人」を主人公とする『セラフィタ』である。作品の結末でその魂が天使となって昇天するセラフィタの言葉と、そのセラフィタに恋する普通の人間ウィルフリッドの描写を以下に対照する。

わたしは天を離れた追放者のようなものです。地を離れた怪物のようなものです。私の心臓はもう鼓動を打ちません。私は自分の力で、自分のためにしか生きていません。私は精神で感じ、額で呼吸し、思考で見ます。私は焦燥と欲望で死にそうです。私の願望をかなえたり、わたしの焦燥を鎮めたりできる人は、地上には一人もいないのです。だから、わたしは泣くことなど忘れてしまいました。わたしはたった一人です。諦めて、待っているのです³⁵。

ウィルフリッドは三十六歳であった。体つきはがっしりと大きかったが、均整はとれていた。人より優れているほとんどすべての人がそうであるように、

³⁴ *Le Chef-d'œuvre inconnu*, CH, t. X, p. 414-415.

³⁵ *Séraphita*, CH, t. XI, p. 746.

背はあまり高くはなかった。胸や肩は広く、心臓が頭に近くなければならぬ人々によくあるように、首は短かった³⁶。

「心臓」の鼓動の止まったセラフィタにおいては、「精神」「額」「思考」すなわち頭脳それ自体が、「感じる、呼吸する、見る」といった通常なら他の身体器官が行うようなことまで一手に引き受けるのに対し、「人より優れている」ウィルフリッド、すなわち人間存在の限界内における一定の完成を体現するウィルフリッドにおいては、「心臓」と「頭」との密接な協同を暗示するかのような「首」の短さが言及され、「脳」の専制が否定される。セラフィタは確かに地上では苦しんでいるが、天使となってその超人性を実現する。ウィルフリッドは天上的存在たるセラフィタに焦られるが、最後は同じ人間たるミンナの内にそのパートナーを見出す。『セラフィタ』という作品は、ある種の「超人」と「偉人」とのそれぞれが、その生きるべき真の領域に到達するまでの様子を描き出したものだと言うことができよう。

『セラフィタ』の例によって、「偉人の首は短い」という命題の言わんとするところがはっきりするよう思う。「偉人」とは、人知を超えた天上的なものと結びついた存在よりも下にあつて、人間社会という枠内で何か具体的な成果を出そうとする者、そしてそれに成功する者のことである。このように理解することによって初めて、一見すると正反対のタイプにみえる登場人物たちの間にある種の共通性が浮かび上がり、バルザックの登場人物における「短い首」という徴候に一義的な意味を与えることが可能になるのである。

4. 実在人物の場合

ここまで「偉人の首は短い」という命題に関して、「短い首」についてはそれを解剖学的な人体観から解釈し、「偉人」については天才や天使といった存在と対照させながらその理解に努めた。以下は傍証となるが、実在人物の描写に現れる「首」に関して、興味深い例が二つあるので紹介しよう。それによって「偉人の首」についてのバルザックの思い込みの強さが、さらにくつきりと浮かび上がってくるであろう。

問題にしたいのは、カルヴァンとカミーユ・モーパンの例である。カミー

³⁶ *Ibid.*, p. 792.

ユ・モーパンは、バルザック自身がジョルジュ・サンドがそのモデルであると明言した登場人物で³⁷、カルヴァンとは次元が異なるにせよ、実質的には実在の人物に数えることができるだろう。実在人物となると、歴史上の人物であれ、同時代の人物であれ、その描写の自由度はおのずから限られるはずであるが、かれらの首はそれぞれ「短い首」、「輪郭のふくらんだ首」といった具合に「脳」と「心臓」の密接な協同を暗示するようなものとなっている。果たしてこれは事実在即しているのだろうか、それとも事実とは無関係に「偉人の首は短い」という法則が過剰に適用された結果なのだろうか。

まずカルヴァンについて。「偉大な扇動家³⁸」「思想の王者」であり、ジュネーヴという街の「立法者³⁹」であったカルヴァンは、自らの思想によって外界の支配を望む「頭脳によって楽しむ人間たち⁴⁰」の一人とされるが、その行動力によって天才型の登場人物とははっきり区別されるので、『人間喜劇』における偉人の一人に数えることができよう。また先ほどの議論で、偉人という存在には「心臓」が象徴するような人間性が欠かせないとしたが、カルヴァンにおける「女性や芸術」に対する無関心は、「自らがその魂であり操縦者であると信じていた⁴¹」愛弟子テオドールへの愛着によって償われているように思われる。その限りにおいて、カルヴァンは非常に人間的な偉人として描かれていると言えよう。このカルヴァンの描写には次のような一節が含まれている。

肥満した結果であるのか、太く短い首のためか、それとも徹夜と絶え間ない仕事のためか、カルヴァンの頭は広い両肩の間に落ち込んでいた⁴² [...]。

すぐ分かるように「太く短い首」と書かれており、これによって「偉人の首は短い」という命題を証明する実例が一つ増える形となっている。問題はこのバルザックが描いたカルヴァンの風貌が、歴史上のカルヴァンの風貌と一致しているのかどうかだが、ニコル・カゾランはバルザックによるカルヴァンの身体描写について次のような注目すべき注釈をしている。

³⁷ *Lettres à madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2 vol. (以後 *LHB* と表記), t. I, p. 668. (23 avril 1843)を参照。

³⁸ *Ibid.*, p. 338.

³⁹ *Ibid.*, p. 340.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 341.

⁴¹ *Ibid.*, p. 343.

⁴² *Sur Catherine de Médicis*, *CH*, t. XI, p. 342.

この身体描写は、痩せ細った禁欲者という伝統的なカルヴァンのイメージとは正反対のものだが、小説家の創案ではない。ルイ・フィリップが1837年に新設した『ヴェルサイユ歴史ギャラリー』(*Galeries historiques de Versailles*)に展示されていたカルヴァンを忠実になぞったものだ。しかしながらこの描写を真正とすることはできない。ここで言及されるカルヴァンが、十六世紀末のドイツの法学者ヨハネス・カルヴィヌス(Johannes Calvinus)あるいはカール(Kahl)であるとするなら話は別だが⁴³。

驚くべき指摘ではないだろうか。バルザックによるカルヴァンの描写は、実は同じ名前を持つ別人の肖像画を写し取ったものらしいのだ。確かにわれわれが目にするのできるカルヴァンの肖像画からすると、彼はむしろ痩せ型の相貌をしており、首が肩に落ち込んでいるというような印象は少しもない。19世紀ラルースにも「残されているカルヴァンの肖像画はどれも、びんと張った長いあごひげを蓄え、頬のこけた、血の気のない、黄色い顔を描いている。」とある。

バルザックは自分の見た肖像画が別人を描いたものどとは気がつかなかったのか。その可能性はもちろんある。しかしここで強調しておきたいのはむしろ、バルザックの抱くカルヴァンのイメージがその肖像画に描かれていた人物のイメージと共振したからこそ、カルヴァンを描くにあたってその肖像画の細部までも利用したのだろうという視点である。「偉人の首は短い」という命題は、バルザックの想像力の源泉にまで染み込んでいたのである。

カミーユ・モーパンの例に移ろう。カミーユは才能ある女流作家であることによって精神的偉大の刻印を押されているわけだが、その作品が自身の波乱に満ちた生活、特に愛情生活と切り離せないものとしてあることを考慮すると、創造する「脳」が激しく鼓動する「心臓」と密接に連携し、二つの器官の拮抗と調和の上に人間的な偉大さを達成している存在とみなすことができよう。『ベアトリクス』におけるカミーユの描写はプレイヤード版でおよそ4ページ続くが、これは『人間喜劇』の中でも最長の例である。そこでカミーユの全身が、身長、皮膚、顔の輪郭、髪、額、眼、鼻、口、顎、耳、身体の線、「首」、腕、手、指という順序で描写されるのだが、「首」についてはこう書かれている。

カミーユの首はうなじのところで窪まずに、ふくらんだ輪郭を形作り、両肩と頭をまっすぐにつないでいる。これは力の明らかな徴である。この首はとき

⁴³ *Ibid.*, p. 1341.

おり運動選手のようなすばらしい隆起と陰影を見せる⁴⁴。

「ふくらんだ輪郭」や「運動選手のような隆起と陰影」を持つとあって、「短い」とは言われていないが、これらは「脳」と「心臓」の密接な関係を喚起するに十分なイメージであろうと思われる。その限りにおいて、ここでも「首」が登場人物の偉大さの徴として機能していると言える。

では、この「首」はカミーユのモデルであるジョルジュ・サンドの「首」を写し取ったものなのかどうか。これについてはアンブリエール＝ファルジョーがプレイアード版の注において大変興味深い指摘をしている。実はバルザックは、この描写を執筆するにあたって、友人テオフィル・ゴーチエが書いたジョルジュ嬢のポルトレを、ほとんどそのままの形で利用しているのである。

ジョルジュ嬢の注目すべき特異性は、首がうなじの側で内側に丸みを帯びるかわりに、上品にふくらんだ輪郭を形作り、両肩と頭の後ろをまっすぐにつないでいる点である。これは、怪力男ファルネーズにおいてその最大限の発達が見られるところの運動選手の体質を表している⁴⁵。

この文章を簡潔にすれば、おおよそのところバルザックによるカミーユの描写になるのが分かる。しかしここで注意しなければならないのは、このゴーチエ描くジョルジュ嬢が、ジョルジュ・サンドとは別人の女優であるという事実である。

バルザックは女優ジョルジュ嬢とジョルジュ・サンドを混同したのであるうか。われわれが参照したゴーチエの全集版では、「ジョルジュ嬢」という題名のすぐ下に「1786年生まれ－1867年没」とあって、1804年生まれのジョルジュ・サンドとは別人であることが分かる。しかしながら、この文章の初出1837年10月26日付『ル・フィガロ』紙上において、1867年という没年が書かれていたはずもなく、生没年が後から付け加えられたものであることは明らかである。さらには、この記事の全体を読んでもジョルジュ嬢について分かるのはパリの美しい女性ということだけであって、彼女が女優であるとはっきり理解するには連載の別の記事にまで目を通す必要がある。よってバルザックがこのゴーチエの文章をジョルジュ・サンドを描写したもので

⁴⁴ *Béatrix*, CH, t. II, p. 695.

⁴⁵ Théophile Gautier, *Portraits contemporains, Œuvres complètes*, IX, Genève, Slatkine Reprints, 1978, p. 577.

あると勘違いした可能性がないとは言えない。

しかしながら重要なのは、ここに描かれているような「首」がカミーユ・モーパンにふさわしいと考えたバルザックの判断の方である。二つの描写をよく比べてみると、ゴーチエのそれは肉体的な強さを問題にしているだけなのに対し、バルザックのそれは「力(force)」という広い意味を持つ語を用いることで「首」が徴候として持ち得る意味の範囲を押し広げようとしているのが分かる。おそらくバルザックは、ジョルジュ嬢の特徴ある「首」に肉体的な発達の証のみならず人間的な「偉大さ」の徴をも見出し、それを「力の明らかな徴」と表現したのだ。両肩と頭をまっすぐにつなぐ「首」とは、バルザックにとって「脳」と「心臓」の強力な連携を可能にする通路にほかならなかった。カルヴァンの例と同じことだが、そのような固定観念がジョルジュ嬢の「首」という実例と強く結びつくことによって、カミーユ・モーパンの「首」の特徴ある描写が決定されたものと思われる。その際、ジョルジュ・サンド本人の「首」が実際どうであったかを問う必然性はもはやなかったであろう。本物よりも説得的な描写がもう完成しているのだから。

おわりに

周知のように、バルザックは同時代の科学的な知を食欲に吸収してそれを作品の糧とした作家である。なかでも人体に関わる知識は、『人間の能力に関する試論』(*Essais sur les forces humaines*)という著作を生涯の仕事として夢想していただけに、バルザックにとって非常に重要なものであった⁴⁶。本論で見たように、一見すると単なる迷妄のように見える「偉人の首は短い」という命題にしても、当時の人体理解をふまえたものであり、19世紀前半の知の状況を現代に伝えているのである。さらに興味深いのは、そうした知識が実在人物をイメージする時にも用いられるほど作家の想像力に影響を与えていたという点である。これは、バルザックにおいて科学的な知識が単に作品の端に接ぎ木されているのではなく、その文学的想像力の領域に深く浸透していたことを示しているだろう。

⁴⁶ 「詩を創り、ひとつの体系の全体を証明できれば、私は『人間の能力に関する試論』の中でその科学にとりかかります。」 *LHB*, t. I, p. 204. (26 octobre 1834)